

場に還つて、斯く再度餘佛餘土の經典にあらはれたのである。斯る意味に於て本迹共に、西方に阿彌陀佛を認め、往生安樂世界を許した、然し斯く西方に阿彌陀佛を認め、往生安樂世界を許したからとて、法華經に説かれた阿彌陀佛及び安樂世界と、觀經に説かれた阿彌陀佛及びその國土たる安樂世界とは、全然別物であつて、決して同一視す可きものではない、この間の消息を嚴格に判ぜられて、日蓮上人は、阿彌陀といふも觀經の阿彌陀にはあらず、所以は觀經の阿彌陀は法藏比丘の阿彌陀、四十八願のあるじ、十劫來道の佛なり、法華經の阿彌陀は、大通智勝佛の十六王子の中の第九の阿彌陀にて、法華經大願のあるじの佛なり、と又曰く、

法華經の心なもしらず、無智にしてひら信心の人は、淨土に必ず生るべしと見えたり、されば生三十方佛前と説き、或は即往安樂世界と説き、是の法華經を信する者の、往生すといふ明文なり、と、この聖判に依つて、假令、西方に阿彌陀を認め、安樂世界を許しても、法華經の阿彌陀と觀經の阿彌陀とは別物である、一は大通智勝佛第九の王子であり、一は法藏比丘の阿彌陀で觀經の主である、又法華經の即往安樂世界と觀經の即往安樂世界とも、根本的に相違があつて、前者は法華經の修行に因ての往生で、後者は觀經の修行に因ての往生である。

次に奪つていふ時、迹門に阿彌陀の名前があり、本門に即往安樂世界の文字があつても、之は全く假設的のものであつて、決して斯る佛陀、斯る淨土があるのではない、時間の上にも空間の上にも、釋迦牟尼佛の外に餘佛ありといひ、寂光淨土の他に淨土ありといふのは、本門壽量品の顯はれざる以前の事、往に壽量品の要解に詳説した如に、壽量品に至つて、一度久遠本佛の開顯と、娑婆即寂光淨土の開顯のあつた以上は、三世十方如何なる時にも如何なる處にも、一つ釋迦牟尼佛の外には決して餘佛なく、寂光淨土の外には決して餘土はない、一切の佛は釋迦牟尼佛の分身として久遠本佛に統一せられ、一切の土は寂光淨土の幻影として本國土に攝盡されて、餘佛なく餘土なきものである、日蓮上人曰く、  
本門の阿彌陀は、釋迦分身の阿彌陀なり、隨つて釋にも、更に觀經等を指すべからず、等と釋し給へり、と、又曰く、

法華經涅槃經等を信する行者は、餘處を求むべきに非ず、此經を信する人の所住は、即ち淨土なり、一爾前の淨土は、久遠實成の釋迦牟尼佛の所現の淨土なり、——壽量品に至つて實の淨土を定むる時、此土は淨土なりと定めしめ。

以上の聖語に依つて、壽量品の宣説せられた後に於ける餘佛餘土の如何なるものであるかは、ほゞ分明した事と思ふ、更にこの問題を一層明確にするには、淨土家に主張する彌陀中心の佛陀觀に就いて、彼の阿彌陀體論並に阿彌陀同體論と共に、大なる誤謬に陥つて居る事を、教理的に説明する必要があるが、それは餘りに専門的でもあり、從つて複雑にもなるであらうから、僅かに一二を論證して、壽量品は徹頭徹尾、釋迦牟尼中心の佛陀觀、娑婆本國土中心の淨土觀である事を、注意するのである、而して之が正當なる佛敎の



佛陀觀であり、淨土觀である。

〔六〕 要文の解釋

▽後五百歳の文、

我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に廣宣流布して、斷絶やしむることなか

れ、  
この文は、法華經の廣宣流布の時代の佛識を示されたものである、凡そ佛教には、時代に依つて、流布す可き經典の如何なるものであるかを、如來自から明示されて居る、而して法華經は、正にこの後五百歳の時よりして、全世界に廣宣流布す可きものである、後の五百歳とは、『大集經』に佛滅後の時代を次の如く區分されてある。

- 第一五百年—解脱堅固の時代 正法の時代
- 第二五百年—禪定堅固の時代

五五百年—第三五百年—多聞堅固の時代 像法の時代

第四五百年—造塔堅固の時代

第五五百年—鬪諍堅固の時代—以下が末法

この各時代に、如何なる經典が流布するものであるか、示されてあつて、法華經は正に第五の五百歳即ち後の五百歳、佛滅度の後二千年を過ぎて末法の始めから閻浮提—世界—に廣く流布して、世と人とを利益し、如何なる邪惡の者も妨害する事の能きぬ由を語られたのである。

▽病即消滅の文、

此の經は則ち是、閻浮提の人の病の良藥なり、若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん、

この經文は、末法に於ける法華經の流布が、如何なる利益あるかを説いたのである、病即消滅は現世の利益であり、不老不死は未來の得益であつて、この法華經こ



そ、末法に於ける人々の今世後世を救済する妙經であるのである、日蓮上人曰く、大集經の五箇の五百歳の中の第五の五百歳に當時は當れり、其第五の五百歳をば、闍諍堅固白法隱没と云つて人の心たけく腹あしく、貪瞋強盛なれば、軍合戦のみ盛にして、佛法の中に先き々々弘まりし所の、眞言・禪宗・念佛・持戒等の白法は隱没すべしと、佛説き給へり——末法當時は、久遠實成の釋迦佛、上行無邊行菩薩等の弘めさせ給ふべき法華經二十八品の肝心たる、南無妙法蓮華經の七字計り、此の國に、弘まりて利生得益もあり、上行菩薩の御利生盛なるべき時なり。

釋尊この藥王菩薩本品を説かせ給ふ時、多くの菩薩は大利益を得、多寶如來は塔中に、宿王華菩薩が斯る尊い藥王の本事を尋ねて、一會の大衆を利益せしめた事を、善い哉、善い哉、宿王華——能く釋迦牟尼佛に、此の如きの事を問ひたてまつりて、無量の一切衆生を利益す、と、讚歎されて本品はその終りを告げて居る。

### 妙音菩薩品第二十四

#### (一) 本品の生起

本品が生起した所以は、藥王品に於て、藥王菩薩が法華經供養の功德に依て、色身三昧の妙用を得たことを宣べてあるが、その色身三昧とは、自己の色身を法華一乘の大道に投じ、煩惱の罪業をのこらず法華經の智火に焼き盡して得たものである、その色身三昧は、普現三昧ともいふので、本品には東方の妙音菩薩を召し、次下の普門品には西方の觀世音菩薩を擧げて、この普現三昧の實際を示さるのであつて、今は正しく、妙音菩薩の色身三昧のはたらきの相を宣べらるのである。

#### (二) 題名の解釋

本品の生起 題名の解釋



「妙音菩薩品」と題名のある譯は、本品に

是の妙音菩薩品を説く、

とあつて、妙音菩薩のことを説き給ふ一品であるが故に、斯く名けられたのである、妙音菩薩は普現色身三昧の徳に依り、妙なる音聲を以て徧く十方に吼はり、この法華經を弘宣せらるゝのである。

### (三) 世尊の放光

釋迦牟尼佛が、頂上の肉髻と眉間の白毫の光明を放たれると、その光明は徧く東方無數の諸佛の世界を照された、其の中に、淨光莊嚴國といふ國があつた、その國の佛は、淨華宿王智如來といふた、その佛の御弟子に妙音菩薩といふ方があつたが、この菩薩は衆の徳本を植え、諸佛を供養し、智慧甚深にして、普現一切色身三昧の徳を成就して居られた、その身に釋迦牟尼の光りを蒙つた處から、宿王智佛に白して、娑

婆世界の釋迦牟尼佛のもとに詣で、釋迦牟尼佛を禮拜し供養し、文殊師利菩薩等にも見たいものであるといはれた、すると宿王智佛が告げられるには、彼の國は穢惡充滿、土地平等ならず、佛身卑小にして、菩薩達も形相小さく、この莊嚴國に比べては、くらべものにならぬ程醜惡いが、

汝往いて彼の國を輕しめて、若くは佛・菩薩及び國土に下劣の想を生ずること莫

れ、と誡められた、その「莫生下劣想」の經文には、誠に深い意味が窺はれるので、それは我等の住んでゐる、この娑婆世界は實は本國土妙の淨土である、娑婆即寂光の本國土であるから、斯く仰せられたのである。

凡そ宗教は行者の機と、信仰の境である本尊とが、相應しなければ、信仰は發りにくい、我等には、奈良の大佛は、どうも本尊としては相應しない、といふて一寸八分の觀音も何だか隔たりがあつて、もの足りない、此の機境相應の深意を合點するなら



ば、淨華宿智如來が妙音菩薩に、娑婆國土に下劣の想を生ずる莫れ、と誡められた意義を了解することが能ざる。

〔四〕 妙音の來集

妙音菩薩は、娑婆に詣でんとして、宿王智佛の神通力を受け、三昧の力を以て靈山に到らんとして、先づ靈山に美事に莊嚴された法座が現はれた、それは美觀を盡したものであつた。

その時に、文殊師利法王子は、この立派なる法座を見て、これは何の因縁で立派な法座を見るのであるかと、釋尊にお尋ねした、釋尊はそれに答へて、こは莊嚴の妙音菩薩が、この靈山に來詣せんとしてあると仰せられた。

すると文殊は、又この菩薩は何なる善本を種え、何なる功德を修し、大神通力と三昧を行じ給ふか、願はくば、我等のために説き給へ、我等も修行せん、願はくば、佛

陀世尊神通力を以て彼の菩薩に見えさせ給へと請ふた。

すると釋尊は、多寶佛に、妙音菩薩を招喚せられよ、と推譲せられたのである、この二佛の推譲の有様は、又我等法華行者の範となるべきものである。

さて多寶佛は、妙音菩薩に來集を命ぜられた、すると妙音菩薩は、八萬四千の菩薩と共に來集せられた、道すがら經た國々は、皆六種に震動し、七寶の蓮華を雨し、百千の天樂自然に鳴り、諸の菩薩衆と共に靈山に來詣し、釋迦牟尼世尊を問訊し奉つた、經に、

少病少惱、起居輕利にして、安樂に行じたまふや不や、四大調和なりや不や、世事は忍びつべしや不や、衆生は度し易しや不や、貪欲、瞋恚、愚癡、嫉妬、慳慢多きこと無しや不や、父母に孝せず、沙門を敬せず、邪見なること無しや不や、善心なりや不や、五情を攝むるや不や、世尊、衆生は能く諸の魔怨を降伏するや不や、久滅度の多寶如來は、七寶の塔の中に在して、來りて法を聽きたまふや不や、



とある、此の問訊の一字一句には、誠に娑婆世界の我等衆生の有様を、明かに宣べられてあるが、誠に慚愧の至りである。

此所へ華徳といふ菩薩が、前の文殊師利法王子の問を繰り返して、世尊に妙音菩薩の善根と神力とを問ひ奉つた。

世尊は華徳菩薩に告げたまはく、この妙音菩薩は、昔し雲雷音王佛といふ佛が在しました。その佛のみもとで、一萬二千歳の間、十萬種の伎樂を供養し、并に八萬四千の七寶の鉢を奉上げた、その因縁果報を以て、今の宿王智佛の國に生れたのであると告げさせられた。

神通力は正しく福德、智慧の二つの果報として現るゝものであつて、福德智慧の因なくして神通の果を得ることは能きない。

### 五 妙音の三昧

妙音菩薩が現一切色身三昧の神通を現じらるゝに、二十四身の應現がある。

- [1]、或は梵王の身を現じ、
- [2]、或は帝釋の身を現じ、
- [3]、或は自在天の身を現じ、
- [4]、或は自在天の身を現じ、
- [5]、或は天大將軍の身を現じ、
- [6]、或は毘沙門天王の身を現じ、
- [7]、或は轉輪聖王の身を現じ、
- [8]、或は諸の小王の身を現じ、
- [9]、或は長者の身を現じ、
- [10]、或は居士の身を現じ、
- [11]、或は宰官の身を現じ、
- [12]、或は婆羅門の身を現じ、
- [13]、或は比丘、
- [14]、比丘尼、
- [15]、優婆塞、
- [16]、優婆夷の身を現じ、
- [17]、或は長者、
- [18]、居士の婦女の身を現じ、
- [19]、或は宰官の婦女の身を現じ、
- [20]、或は婆羅門の婦女の身を現じ、
- [21]、或は童男、
- [22]、童女の身を現じ、
- [23]、或は天、
- [24]、龍、
- [25]、夜叉、
- [26]、乾闥婆、
- [27]、阿脩羅、
- [28]、迦樓羅、
- [29]、緊那羅、
- [30]、摩睺羅伽、
- [31]、人非人等の身を現じて、
- [32]、是の經を説く、
- [33]、生、及び衆の難處、皆能く救濟す、
- [34]、乃至王の後宮に於ては、變じて女身と爲りて是の經を説く、



これが妙音の三十四身と稱するものである、華德菩薩がこの三昧の徳を聞いて、妙音菩薩が變現自在に衆生を度脱する譯を問ふに至つた、世尊はこの三昧を現一切色身三昧と名けて、この三昧の中に住して、妙音菩薩は無量の衆生を饒益するのであると説かせられた。

〔六〕 聞品の功德

是の妙音菩薩品を説きたまふ時、妙音菩薩と俱に来れる八萬四千人皆現一切色身三昧を得、此の娑婆世界の無量の菩薩亦是の三昧及び陀羅尼を得たり、と、法華經が一經を通じて、聞品の利益を大いに説いた事は、經力の無邊なるによる次第である、妙音菩薩は、釋迦牟尼佛、多寶佛塔を供養し、本土に還歸られたが、前同様に、經る所の諸國は六種に震動し、寶蓮華を雨らし、天鼓は自然に鳴り、本國に歸つて宿王智佛に復命を爲したまふた。

菩薩たちの聞品の利益のみならず、四萬二千の天子は無生法忍を得、華德菩薩も法華三昧を得られた。

觀世音菩薩普門品第二十五

〔一〕 本品の生起

本品は、前の妙音品と同じやうに、普賢三昧を示すのである、普賢三昧は衆生の機根に隨ひ、時に應じ所に臨んで、種々にその身を應現することをいふのである、妙音菩薩の普賢三昧は、前に述べし如く、能化者の誠めを説いて、此土の佛身と佛子と佛國に對して、輕蔑の念を生じてはならぬ、と誨へられた、正しく當品は、所化者の誠めを説かんがために、生起したのである。

觀音の三十三に身を現するといふことも、變つた譯ではない、言ひ換へて見るなら



ば、化他濟度の意に外ならぬ。

觀世音菩薩に對する崇拜信仰は、我國古來より甚だ盛んなものであつて、今の觀音崇拜もその遺風である、法華已前に、この菩薩のことが、諸經に多く散説されてあるのも、盛んになつた一つの譯であらう、また觀音の名稱については、六觀音、七觀音、十五觀音等と、數多の名稱が見えるが、今六觀音の名稱だけ擧げて見るならば、正觀音、千手觀音、馬頭觀音、十一面觀音、准泥觀音、如意輪觀音である、これらも崇拜の念を起さしめた次第である。

觀世音菩薩は、色心三昧、普門示現、法華三昧の表現者であり、體現者である。法華一經を研究し、鑽仰し、歸依し、信仰する人で、觀音の化用を見て、觀音を、本師本佛たる釋迦牟尼如來よりも、尊崇し有り難がつて、この菩薩にのみ歸依信仰するの輩は、法華一經の經意に反するものである、本品に觀音の利益を説かれてある所以は、左様に散漫雜亂のものではない、須らく正念正信に住して、親しく本品の經文

を拜するならば、囚人の菩薩たる弟子でさへも、如斯に普賢三昧の化用があるではないか、況して果人の本佛おやと釋迦牟尼の妙用の、無限絶大なることを、觀音に寄せて説かれたのである。

然るに、今尙、堂々たる佛敎家を以て任じて居る人達の中に、觀音を解釋するに、この道理を忘れて、觀音を本尊の如く考へるのは、普門品の眞意義を辨へざる傍法不信の者である、猛省すべき一大事ではないか、もし觀音を單獨的信仰の對象と見るならば、何故に壽量大敎義の後にあるであらう、斷じて左様な理由解釋は、認容することはできない、何といつても、釋迦と觀音との關係が、本品に依つて會通がでなかつたならば、法華經を讀んだ人ではない、勿論信仰の正系を得た者ではない。

## (二) 題名の解釋

本品を「觀世音菩薩普門品」と題された譯は、普門示現を觀世音菩薩が表はされた

本品の生起 題名の解釋



ので、此の名を附せられたのである、經文に、

善男子、若無量百千萬億の衆生ありて、諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞きて、一心に名を稱せば、觀世音菩薩、即時に其音聲を觀じて皆解脱することを得しめん、

とあるので、觀世音の名稱のあるところが明かである、「普門」とは、普門示現といつて、普は周遍、門は開通の義で、觀音は普賢三昧力を以て、種々に身を示現し、機に應じて説法し、この門より衆生を救済するといふ事である。

譯語については、觀自在とした方がよいといふ説もあるが、此の菩薩の化用の正意から窺ふたならば、觀世音と意譯されたことが、いかにも適切であると思はれる。

三 聞品の得益

無盡意菩薩が釋尊に向つて、觀世音菩薩とは、いかなる因縁をもつて、名づけられ

たのであるかと問ひ奉つた、釋尊は答へさせ給ふて、世の多くの人々が、有ゆる苦しみと惱みを受けんに、此の菩薩の名を聞いて、一心に稱名せば、此の菩薩が即時に、その音聲を觀じて、皆苦惱から解脱せしめらるゝのである、と仰せられた、そして衆生が是の觀世音菩薩の名を持つならば七難を脱れ、意に念ずるものは三毒を離れ、身に禮拜せば、二求を満足することができると示された、七難とは、

- 一、火難、二、水難、三、羅刹難、四、刀杖難、五、鬼難、六、枷鎖難、七、怨賊難、

であつて、名を持つものは此の七難を免かれることができる、この七難について、精神的に釋すると、事實的に釋する人があるが、これは二者いづれに偏してもならぬと思ふ、例へば火難といへば、瞋恚の火焰が、信仰の力でしづまるといふのも固より信するが、更に火災をも免れるものであると信す可きである、斯くあらねば、強き信仰は生れぬものである、後の六難も、此の意味を以つて解したならば、明了に會得す



ることができるのである。

次にこの觀世音菩薩を、つねに念じたならば、三毒を離れるとある、三毒とは、一、貪欲、二、瞋恚、三、愚痴である、もし人あつて淫欲多からんに、此の菩薩を念ずれば、その煩惱を離れ、瞋恚強き人も、つねに念じ恭敬せは、煩惱を除くに至るのである、これはつねに、信仰の力が人をして、眞善美化せしむるの經意である。

それから、二求とは、此の菩薩を禮拜供養する人で、男子を求めんには、福德智慧の男子を生み、また女子を求めんには、衆人に愛敬せらる、端正有相の女子を生むことが能きる。

七難を免れるのは、口業の一心稱名の功德であり、三毒を離れることは、意業の常念恭敬の功德である、二求の満足は、身業の禮拜供養の功德である、これが七難三毒二求の利益といふのである。

〔四〕 三十三身

無盡意菩薩が、釋尊に白されるには、

世尊、觀世音菩薩は、云何がして此娑婆世界に遊ぶ、云何がしてか衆生の爲に法を説く、方便の力其事云何、

と、觀音の三輪の化用を問ひ奉つた、釋尊はこゝに、

- [1]、佛身、[2]、辟支佛の身、[3]、聲聞の身、[4]、梵王の身、[5]、帝釋の身、[6]、自在天の身、[7]、大自在天の身、[8]、天大將軍の身、[9]、毘沙門の身、[10]、小王の身、[11]、長者の身、[12]、居士の身、[13]、宰官の身、[14]、婆羅門の身、[15]、比丘、[16]、比丘尼、[17]、優婆塞、[18]、優婆夷、[19]、長者の婦女、[20]、居士の婦女、[21]、宰官の婦女、[22]、婆羅門の婦女、[23]、童男、[24]、童女、[25]、天、[26]、龍、[27]、夜叉、[28]、乾闥婆、[29]、阿修羅、[30]、迦樓羅、[31]、緊那羅、[32]、摩睺羅伽、[33]、執金剛神、



の三十三身を示現し、十九種類の説法を以つて、衆生を濟度する由を答へさせられた、要するに三十三身といふも、十界の身を應現するに外ならぬのである。

〔五〕 本品の結歸

觀世音が、三十三身に身を現じ、衆生を利益濟度する妙力の源泉はといへば、天台大師は、

法華三昧不思議の身、自在の業を證得するにあらざらんよりは、よく此の三十三身を現せん、

と、また藥王品には、

我れ現一切色心三昧を得たること、皆是れ法華經を聞くことを得る力なり、と、これを見ても明らかに、觀音の自在力は、法華經の經力たることに、一點の疑もない。

こゝに無盡意菩薩が、誠に綺麗な瓔珞を觀音に供養せんとしたが、觀世音菩薩は、釋尊の許可か下らないので受けられなかつた、すると釋尊は、觀音にこれを受納するやうにと許可された、そこで觀世音は佛命を奉じて受納し、直ちに二分して釋迦多寶の二佛に御供養白上げた、經に、

其の瓔珞を受け、分ちて二分と爲して、一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛塔に奉つる、

と、これ觀音が一つの供養を受くる事さへ、釋尊の許可がなければ、能はぬ由を示されたもので、この事實を了解するならば、本佛釋尊より觀音を有難たがるやうな誤解はなくなるであらう、偈文は長行と同一であるから略する。

陀羅尼品第二十六



〔一〕 本品の生起

五番の善神、陀羅尼呪を説いて、如來の滅後に、法華修行の人を守護することを、明すのが、當品である、この陀羅尼品は、法を以て行者の守護を明し、次の嚴王品は、人を以て法の守護を宣べられたのである、それであるから、この陀羅尼の一品は、經を護らんが爲、法を重んずるが爲、法師と行人とを護ることを説かれたもので、單なる俗信、迷信の雜邪の祈禱者が、除病滅罪の經典と考へて居るのは、大なる誤謬である。

凡そ法華の祈禱は、護持正法の爲の祈禱である、國運隆昌の爲の祈禱である、であるから立正安國の四大文字を忘れては、祈禱の本旨に反するものである、この意味を心得て、個人の祈もせねばならぬ、陀羅尼品を祈禱經と心得て、漫りに迷信者流が、俗惡なる祈禱をするのは、慥かに經を無みし、佛意を損ふものである。

〔二〕 題名の解釋

「陀羅尼品」とは藥王と勇施との二聖、毘沙門と持國との二天、それに鬼子母神、十羅刹女を加へて五番の善神が、陀羅尼呪を説いて、法華經の行者を守護す可き由の誓を明したから、この題名があるのである。

陀羅尼とは、梵語の音譯である、この陀羅尼の語には、多含無量の意味があつて、例せば日本の二字に、國土も人畜も、山川も、草木も總てが攝まつて居ると同様な意味のものである、それであるから陀羅尼の語は、五種不翻の一つとなつて居つて、これを譯するなら、却つてその語義が隠れると迄いはれて居る。

『正法華經』には、本品を「總持品」と譯して居る、總持とは陀羅尼の意譯であつて、惡起らず、善失せず、能く善を持し、惡を遮す、といふ多くの意義がある、即ち總ての善を持し、總ての惡を遮す事が、陀羅尼の力であり又意味である、呪とは軍中



の密號と同じ事で、敵味方入り亂れた時の符合辭である、俗にマジナイといはれて居る。

五番の善神は、この陀羅尼呪を説いて、天魔鬼神が、法華經の行者に怨をなし、敵對せんとしても、守護して行者の身邊に近寄らしめざらん事を誓つた。

因に妙法蓮華經は、陀羅尼王である、この妙法こそ本佛の持言密語である、この事をよく了解してゐないと、祈禱には、陀羅尼品を亂讀して、唱題行を輕んずるやうな、傍正顛倒の邪見を生ずるであらう、これでは法華經を讀むと雖も、却つて法華經の心を死すものである、日蓮上人曰く、

南無妙法蓮華經を受持するを以つて、呪とはいふなり、若有能持即持佛身、とマジナイたるなり。

### 〔三〕 修行の勝劣

先づ藥王菩薩が、釋迦牟尼佛に向ひ、若し人あつてこの法華經を能く受持し、讀誦し、通利し、書寫せん者の功德は、いかばかりかと問ひ奉つた、如來は、八百萬億那由佉恆河沙の諸佛を供養した功德よりも、この經の一句を受持し義解した功德の方が多い、經には、  
説の如く修行せん功德甚だ多し、  
とある、かくこの經の功德の大なるを聞いて、先づ藥王菩薩が經法守護に任ぜんとしたのである。

### 〔四〕 一聖の神呪

茲に於て藥王菩薩は、法華修行の法師に陀羅尼呪を與へて、守護す可き由を誓ふて、四十三の呪をとぎ、而してその呪を歎美した、そこで釋尊は、藥王を讚めて、善哉、藥王、——諸の衆生に於いて、饒益する所多からん、



と宣べられた。

次で勇施菩薩が釋尊に白して、いはるゝには、我れも亦、この法華經を受持し讀誦せん者を、陀羅尼を以て守護し、夜叉、羅刹等が、行者のすきを伺ふことを得せしめずと、佛前に十二の神呪を説き、その陀羅尼を讚歎した。

〔五〕 二天の神呪

その時に毘沙門天王は、佛に白して我れこの衆生を愍念し、この法師を擁護せん

と、六つの神呪を説き、且つ稱歎し、  
百由旬内に、諸の衰患無からしむべし、  
と、行者の守護を誓願した、

次で持國天王は、多くの乾闥婆衆と共に佛前に詣り、九つの陀羅尼呪を説いて、法華經を持たん者を擁護せん、と宣べ稱讚をなしたのである。

〔六〕 羅刹の神呪

その時に羅刹女有り、一をば藍婆と名け、二をば毗藍婆と名け、三をば曲齒と名け、四をば華齒と名け、五をば黒齒と名け、六をば多髮と名け、七をば無厭足と名け、八をば持瓔珞と名け、九をば阜諦と名け、十をば奪一切衆生精氣と名く、是の十羅刹女、鬼子母、并に其の子、及び眷屬と俱に佛所に詣で、同聲に佛に白して言さく、

世尊、我等亦、法華經を讀誦し受持せん者を擁護して、其の衰患を除かんと欲す、  
若し、法師の短を伺ひ求むる者有りと、便を得ざらしめん、  
と、行者の守護を誓ひ、十九の陀羅尼呪を説き、重ねて、

我が頭の上に上るとも、法師を惱ますこと莫れ、  
と誓ふたのである、若し我が呪に隨はずして、



説法者を亂せば、頭破れて七分となること阿梨樹の枝の如くならん、と、有名な孤起偈が説かれてある。

【註】孤起偈とは、長行を重説せざる偈のことである。

〔七〕 羅刹の誓言

もろくの羅刹女、上の偈を説き了つて、更に、世尊、我等亦當に、身自らは是の經を受持し、讀誦し修行せんものを擁護して、諸の衰患を離れ、衆の毒藥をも消せしむべし、

と誓ひをなしたのである。

世尊は、羅刹女に告げられて、

善哉、善哉、汝等但能く、法華の名を受持せん者を擁護せんすら、福量るべからず、

と印可せられた、この文が、法華唱題行の要文である、この羅刹女が、法華受持者を守護する功德は、如來の心を以てするも量ることが能きぬ、と仰せられた、であるならば、直接この法華經の御名である題目を唱へ奉つたならば、更に大なる功德のあるべきは、明なる道理である、目蓮上人曰く、

問て云く、佛の名號を持つ様に、法華の名號を取り分けて、持つべき證據ありや如何、答へて云く、佛諸の羅刹女に告げ給はく、善哉善哉汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せん福量るべからずと云々、此文の意は、十羅刹女の法華の名を持つ人を護らんと誓言を立て給ふを、大覺世尊讚めて言はく、善哉善哉、汝等南無妙法蓮華經と受け持たん人を守らん功德、いくら程とも計りがたく、めでたき功德なり、神妙なりと仰せられたる文なり、是れ我等衆生の行住坐臥に南無妙法蓮華經と唱ふべしと云ふ文なり。



### 妙莊嚴王本事品第二十七

#### 〔一〕 本品の生起

前品に於ては、陀羅尼神呪を説いて、法を以て人を守るべきを明されたのである、此の妙莊嚴王品は、法華の行人であるところの子が父を救ひ、妻が夫を助けた因縁を説いて、人を以て法を護るべきことを示さんとして、本品は生起したのである。

#### 〔二〕 題名の解釋

「妙莊嚴王」のことは、『藥藏菩薩經』に委しく説かれてある、その大要を述ぶるならば、古或る一人の佛の滅後、末法の時代に、四人の比丘があつた、道徳堅固に、法華經を思ひ揃ふて、閑靜なる地を選んで修行を勵んで居た、斯様に行法を精進したが、

日々の食事の供養を受けなければならぬので、托鉢して歩いて、食糧を得れば、讀誦修行を怠らなかつた、すると其中の一人が發願して、我一人托鉢し、その供養を以て三人に配たん、と云つたので、四人の行者のうち三人は、終日終夜、専心讀誦修行をなし、一人は普ねく四隣を經過り、供養物を持ち歸つて、三人を扶養して居つたが、月を重ね歳を経るうち、或時その一人の托鉢僧が、威儀堂々たる大王の、行列嚴かに旌旗の翻へるのを見て、氣動き念搖ぎ、國王の光景を羨望して、我れ來世は、斯る國王の果報を受けんと心願した。

彼れは命終の後、善根功德力に因り國王と生れたが、果報は次第に減じ衰へて、最後は小國王と生れて來て、外道邪見の法を信するはかなきものとなつたのが、今の妙莊嚴王である、かくなると、積める善根は盡きはて、こんど命終の後、惡道に墮ちねばならぬ恐るべき運命になつた。

さて一方に、かの専心に法華經を修行して居た残りの三人は、命終の後いづれも法



華三昧を得るに至つたので、かの惑れなる妙莊嚴王をして、邪心を轉じ正法を信ぜしめんと、一人は端正き王の夫人となつた、是が淨徳夫人である、後の二人は、王の如き兄弟二人の愛子となつて、王を引導したのが淨藏、淨眼の二子である、これがその大要であつて、本品はこの妙莊嚴王の本事を説かせらるゝので、この題名があるのである。

〔三〕 二子の神變

その時に釋尊が、大衆に告げらるゝには、古昔、雲雷音宿王華智佛といふ御佛の御世に、妙莊嚴王といふ王があつて、夫人の名を淨徳といひ、兄弟二子を淨藏淨眼といつた、かの佛はこの王を引導せんとして、法華經をお説になつた、二子は母のみ許を得て、雲雷王佛の法座に詣で法華經を聽聞し奉つらうとした、すると母の淨徳夫人は、二子に告げていはるゝに、父の妙莊嚴王は、外道婆羅門の法を信じて居られるので、容易にお許しもなからうが、行いて願ふやうにといつた、二子は外道邪見の

家に生れたことを憂ひながら、この父の邪見を轉じ、雲雷音王佛の御許に赴かれんことを勧めんが爲め、神變不思議の力を現じて、空中に行住坐臥し、身より水を出し、身より火を出し、大身を示し、小身を現じ、種々に變化を示した、父の王は、二子の神力を見て心大に歡喜し、何れの師に隨がつて、斯の如き神變をなすのであるかと問ふた、二子は、師と仰ぐは雲雷音王佛で、信する法は法華經であると答へた、この時父の王は、二子の神通に驚いて、然らば、我れも汝の師雲雷王佛の御許に詣づるであらうと、歸伏されたので、二子は更に出家の許しを請ひ、こゝに妙莊嚴王は、群臣眷屬二王子等と共に、雲雷音佛の御もとに至り、その説法を聽聞して、各々三昧の徳を得た、そこで王及び夫人は大に歡喜して、頸の眞珠瓔珞を解いて、佛に供養した。

其時に雲雷音宿王華智佛は、妙莊嚴王に、汝は必ず作佛して婆羅樹王佛となるであらう、と授記された、王は即時に王冠を弟に譲り、夫人二子諸眷屬と共に、出家得



道して法華經を修行された。

〔四〕 轉我邪心

昔も今も變りなく、迷を轉じて悟りを開き、邪を捨て、正に歸する事は、強い一種の實感より來るものである、外道婆羅門の法に深く執著してをつた妙莊嚴王も、二子の神通變化を見て驚歎し、いかにも佛の教でなくてはならぬと、

我が邪心を轉じて、佛法の中に安住することを得、

世尊を見たてまつることを得しむ、

とあるが、この轉我邪心は、必ずしも長き時間を要しないで、刹那心に於ても成就することが出来るものである、日蓮上人は聖語に、

百年の闇室、一時の燈火、

と仰せられたが、この間の消息を窺ふことができ得られる、淨藏淨眼の二王子の神

變々化は世の魔術、幻術の如きものではない、正しく法華三昧の力の現はれである。

〔五〕 三種の知識

王は二王子を歎めて、

此の二子は、是我が善知識なり、宿世の善根を發起して、我を饒益せんと欲するを爲つての故に、我家に來生せり、

と、すると雲雷王佛は、

大王當に知るべし、善知識は大因緣なり、

と仰せられた、大菩提を成し、佛身を莊嚴することは、善知識に依り、又、成佛の所詮は善知識である、との聖意である。

佛教には、知識に就て三種の善知識が明されてある、一には、外護、二には、同行、三には、教授である、外護とは、僧俗を擇ばず、過ちをいささず、よく愛護し、母の



子を養ふが如く、虎の子を啣むが如く、道を行ずる人をよく護るのが、外護の善知識である、同行とは、行者互に相策勵し、切磋琢磨し、心を同じ、志を等しうすること、一船にあるが如く、互に相敬重すること世尊を視るがごとくすることである、教授とは、善巧に法を説き、示教利喜して、人の心を轉破するのを教授と名くるのである。

この三善知識は、法華修行の上に誠に大切なることで、妙莊嚴王の如き邪見の人をして、記別を受くる迄に至らしめたことは、是れ全く善知識の力である。

〔六〕 聞品の悟道

妙莊嚴王は、佛に白して、

世尊、如來は甚だ稀有なり、功德智慧を以つての故に、頂上の肉髻光明顯照す、其の眼長く廣くして紺青の色なり、眉間の毫相、白きこと珂月の如し、齒白く、齊

密にして常に光明有り、唇の色赤好なること、頻婆果の如し、

と、佛を讚歎し奉つて、

我今日より、復自ら心行に隨はじ、邪見、憍慢、瞋恚、諸惡の心を生ぜじ、

と自ら誓ひをなされた、この自誓は誠に尊いものである、いかにも一度、佛陀の光明に照破せらるゝならば、如何なる邪見の人も靈化せらるゝものである。

釋尊は、大衆に妙莊嚴王の本事を明かして、それは別人でもない、今の華德菩薩である、淨德夫人は、今の莊嚴相菩薩——妙音菩薩——である、淨藏淨眼の二王子は藥王、藥上の兩菩薩である、この二子は、

諸の大功德を成就し已て、無量百千萬億の諸佛の所に於いて、衆の徳本を植ゑて不可思議の善功德を成就せり、

と説かせられた。

この妙莊嚴王本品を説き給ふ時、八萬四千人、遠塵離垢して、諸法の中に於い



て、法眼淨を得た、

法眼淨とは、先哲は、六根清淨の中の、正しく法眼淨の位であると云はれてある、以上の經意を推講して見るならば、人を以て法を護ることが、明了に信解し得らるるであらう。

### 普賢菩薩勸發品第二十八

#### 〔一〕 本品の生起

前品の嚴王品に於て、法華經の説法は、一先づ終りを告げたのであるが、東方の寶威徳佛の弟子である、普賢菩薩が、法華説法の大法座の閉じらるゝことが如何にも名残り惜しさに、遙ばると來つて、重ねて法華經を説かせ給へとひ奉つた、そ

の戀法の有様は、暮行春の花の散るを惜しみ、中秋三五の月の雲霧に蔽はるゝを悲しむそのやうに、この普賢菩薩が、釋迦牟尼如來に法華の演説を、再び請ひ奉つたので、如來は、四法を説いて、法華一經を、本品に説き縮められたのである、換言すれば、法華一經の要旨を簡結せられたのであつて、普賢菩薩の勸發が、本品の生起を見るに至つたのである。

#### 〔二〕 題名の解釋

「普賢」とは、普は、その徳天地に満つるとあり、賢は利他善行成就のことだとあるが、普賢菩薩が再び法華經を、説かせ給へと勸發したので、この題名があるのである。「勸發」とは、戀法の辭だといふてあるから、正しく普賢菩薩の戀法の情は、勸發となつて、再び釋尊の演説法を見るに至つた、それであるから、本品のことを「再演法華」とも、「略法華」とも稱するのである。



〔三〕 四法成就

普賢菩薩は、神通力を以つて、この娑婆世界に來り給ふ、その通り給ふ國、地は震動し天より華雨り、空には伎樂が聞へた、普賢は靈山に到つて、釋尊を禮拜して、世尊、唯願はくば當に爲めに説き給へと、經に、

若し、善男子、善女人、如來の滅後に於いて、云何にしてか能く是の法華經を得ん、そこで如來は普賢菩薩に告げて、

者し善男子、善女人、四法を成就せば、如來の滅後に於いて、當に是の法華經を得べし、一には、諸佛に護念せらるゝことを爲、二には、諸の徳本を植ゑ、三には、正定聚に入り、四には、一切衆生を救ふの心を發せるなり、善男子、善女人、是の如く四法を成就せば、如來の滅後に於いて、必ず是の經を得ん、と、仰せられて、法華一經の要旨を示められたのである、即ち四法とは、

一 諸佛に護念せらるゝことを爲、

二 諸の徳本を植ゑ、

三 正定聚に入り、

四 一切衆生を救ふの心を發せるなり、

いま四法に就いて、少しく要解するならば、佛滅後に於ける我等の法華の信仰には、是非ともこの四つの法を心得て置なくてはならぬ。

第一の諸佛護念とは、壽量教義の要旨にもとづき、本化の大事に従がつて見るならば、いふ迄もなく、久遠本佛毎自の本願に常護せらるゝことである、外よりは本佛に愛護せられ、本佛の守護加はつて、かの尊とき本因妙の位——菩薩の位——に安住することが能きるのである。

第二に植諸徳本とは、よく内に、世間的にも、出世間的にも、信仰の妙力を以つて、諸の徳本を植ゆるのである、即ち諸佛護念は外の力を、植諸徳本は、内の力をい



はれたのである、我等の信仰には、斯様に内外の信仰的道德を、培養してをかなくなくてはならぬ。

第三の正定聚とは、先づ定聚には三種のものがあつて、一、不定聚、二、邪定聚、三、正定聚である、これを平易に説くならば、不定聚とは、正邪何れとも未だ定まらぬ、不確實な集團で、邪定聚とは、一向邪惡に固まつた團體で、正定聚とは正しき信仰、正義の信心の團結である、明らかに本佛を信じ、自己の實在不滅を信じたならば、決して、その信仰に退轉があるべきものでない、恰かも闇中に咫尺を辨ぜざるものが、一方に、光明を認めたらば、どうして後へ歸へられよう、逆行が能きよう、必ず光明に向つて進み行くものである、その様が即ち不退轉の行であつて、これが正定聚の有様である。

第四の發救一切衆生之心とは、利他心である、眞に法華信仰の一念には、必然的に上には菩薩を求め、下に衆生を化するといふ熱烈なる心が、彌やが上にも、彌や發るべきである。

我等の小智にてこの解釋は、佛意の一部分も述べ得られないが、誠に尊いことである、今、重複ではあるが、護念力外より加はり、徳本内より發し、正定聚の人となつたならば、如何してじつとして居られよう、聖き活動を發すべきは當然である、いづつものながら、此の四法の經文を拜すること、感憤措くあたはぬ次第である、此の四法の義が明了になるならば、法華の信仰に邪義迷信の生ずる事は毫もない筈だ、猛省一番この法華の縮説を信解すべきである。

〔四〕 普賢の誓願

四法を説かせられて、釋尊は、是の如く四法を成就せば、如來の滅後に於て必ず是の經を得ん、と、宣べ給ふた、必得是經の金口は、鏘々たる妙音である、四法の信仰とは、實行を



指していはれたのである、即ちこれが身讀である、斯様な有難い四法を聞いた普賢菩薩は、更らに進んで末代惡世に是の法華經をたもつものを、守護して惡魔、魔民等の難を免がれしめんとて若しこの經を行ぜば、白象王に乗つて身を現はして守らん、と普賢自身が法華の行者の守護を誓願せられた、經に、

我が身亦、自から常に是の人を護らん、

と誓ひ、二十の陀羅尼咒を説いて、守護をのべた、經文には法華書寫の人、命終して勿利天上に生れんと、こゝに一言すべきことは、五種の修行のうち、書寫行は、受持に比ぶれば、劣つて居るのである、その書寫行でさへ斯様な功德がある、況んや受持行をやと、況顯せられたのである、受持、讀誦、解説のものをば、命終の後千佛、手を授けて兜率天上に行かんとある、かく説いて功德を現はすのは、それは諸經に多く兜率天彌勒菩薩の説のあるに従がひてその執情を統べ、一轉して佛果を知らしむる爲めである、これは華報である、眞の利益は果報たる妙覺でなければならぬ。

【註】この兜率天云々の本化的解釋は、即往安樂世界の會通を參考にして貫へば、一目瞭然であらう。

〔五〕 護法の讚歎

釋迦牟尼佛は、普賢菩薩を歎めさせられて、

是の經を受持し、讀誦し、正憶念し、修習し、書寫することあらん者は、當に知るべし、是の人は、則ち釋迦牟尼佛を見たまつるなり、佛口より此經典を聞くが如し、

とある、日蓮上人の御妙判に、

此の文を見るに法華經は釋迦牟尼なり、法華經を信せざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り、此經を信する者の前には滅後たりと雖も佛の在世なり、

是の人は、釋迦牟尼佛の御手を以て、その頭を摩することを爲ん、當に知るべし、



是の人は、釋迦牟尼佛の衣に覆はるゝことを爲ん、

と、日蓮上人曰く、

釋尊衣を以て覆ひ給ふとはねんごろの義なり、

そして五欲に囚はれず、邪教に惑はされず、邪惡の人に惱まされず、少欲知足の益

を得ることを示されて、經に、

亦現世に於いて、其の福報を得ん、

當に今世に於て現の果報を得べし、

と、あつて、現世の現報をも明らかに宣べさせられた、日蓮上人曰く、

法華經の八の卷に云はく、若し後の世に於てこの經典を受持讀誦せんものは乃至所

願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん、又云く若し之を供養し讚歎することあ

らん者は、當に今世に於て現の果報を得ん等云々、此の二つの文の中に、亦於現世

得其福報の八字、當於今世得現果報の八字、已上十六字の文むなしくて、日蓮今世

に大果報なくば、如來の金言は提婆が虚言に同じく、多寶の證明は瞿伽利が妄語に  
異ならじ、謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮べからず、三世の諸佛もましまさざる  
か、されば我が弟子、心みに法華經のごとく身命もおします修行して此度佛法を心  
みよ、

釋尊は、斯く法華經受持信仰の功德の廣大な事を、明さるゝと共に、若しこの法華  
經を行する人を、輕毀するならば、其の罪果惡報は、眞に恐るべきものである由を、  
いと嚴格に示されたが、この罪報を明かさる所以は、我等佛滅後の衆生をして、法華  
經の信仰に、過なからしめんが爲である、斯くして再演法華の一品を聞いた一會の大  
衆は、皆大いに歡喜して、佛の梵音を信受し、禮を作して去つた、茲に於て、二處三  
會の説法は、名殘惜しくも最後の幕が閉ざされたのである。

日蓮上人曰く、

今日蓮は、去ぬる建長五年四月二十八日より、今年弘安三年十二月に至るまで、二



法華經要解  
 十八年（一九二〇年）が問（問）又、佗事（他事）もなし、只妙法蓮華經の五字七字を、日本國の一切衆生の口（口）に入れんとはげむ計り也、此れ即ち、母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲也

法華經要解終

大正八年五月十一日印刷  
 大正八年五月十四日發行

◆法華經要解 奥付  
 正價金壹圓六拾錢

著作  
 所有

著者 能仁事一  
 發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 株式會社 博文館  
代表者 取締役 社長  
 印刷者 東京市牛込區櫻町七番地 渡邊八太郎  
 印刷所 東京市牛込區櫻町七番地 日清印刷株式會社

發行所 株式會社 博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地



# 法華經講義

全二冊  
菊判洋裝特製函入美本  
紙數各壹千餘頁  
上巻各二圓三十錢  
下巻各二圓三十錢  
郵稅各冊十二錢

東郷元帥外朝野諸名士題字  
博士文學  
三宅雪嶺序文  
大僧正  
本多生日猊下著

本書は佛教史三千年間に現れたる法華經に關する各種の思想は悉く之を參照し正法華經ケルン譯等を對照して法華の全文を詳細に解説し他面には法華經を基準として現代に要求する宗教の要義を批判し又我邦の文學史を考察して此經に關する詩歌を列舉し更に經中の要處には日蓮聖人の遺訓を引證し又科段は綿密なる圖表を附せり、序説には佛教全般に關する要義を擧げて之を解説し、釋文には釋題、大意、文々解釋の三段に分ち、文々解釋の下には科段、通解、妙解、異解、批判、實義、解決、參考、讚唱の項目を立て、極めて懇切に之を説明せり。法華經が世界最第一の寶典たるは世既に定論あり苟くも思想の源泉を掘んで正明なる信解を得んとするものは何人も研究し讚仰すべき唯一の寶典なり。

株式會社  
東京 博文館發行所  
本町

東京帝國大學文學部大科大學教授  
文學博士  
姉崎正治著

# 法華經の行者日蓮

圓滿の人格、血涙の一生、熱火の信仰、深遠の理想、描き來つて史詩あり、紀傳あり、哲學あり、宗教あり、懺悔の告白と救世の使命と、憂國の警策と感應の法樂と、奮戦の叫びと信仰の凱歌と參差照應の壯觀古今に冠絶す。忠實に上人の遺文に基き、佛教史、宗教學、宗教心理の通義に照らして「法華經行者」の一生を活現す。是れ二十世紀の新法華經也著者研鑽十五年、「法華經行者」を世界に公表すると同時に之を日本の公衆に薦む。

大判總布函入紙數六百餘頁  
筆蹟(コロタイプ)寫眞、凸版)十五枚  
肖像寫眞版大判地圖各一葉  
正價二圓五十錢  
送料内地十二錢

# 解說要本 法華經の行者日蓮

「法華經の行者日蓮」の「廣本」は批評研究的、今度の「要本」は解説的に要を摘むて、佛教の術語を一々近代語に直し、又脚註で解説したるもの。「廣本」以後の新研究や、以外の材料を加へて、而かも容易に通讀し得る様、「廣本」の四分一で「法華經行者」の經歷、思想、信仰、努力、血と涙との跡を傳へたのが、この一篇。

三六判總布天金縁函入美本  
日蓮上人眞蹟六葉挿入  
正價金八拾五錢  
郵稅六錢

株式會社  
博文館發行所



大僧正 本多生日 師撰述

# 大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙  
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序  
文學博士 姊崎正治先生論文

全部十八卷  
菊判洋裝上製函入美本  
三方金每卷四百頁以上

本書は大藏經中重要な經典約壹千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し且要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を諦觀するの必要に迫れるの時この大著に接す。心ある國人は舉つて本書の出現を歓迎すべきなり。(大正六年)

自第壹卷  
至第拾八卷

改正  
定價

各冊貳圓四拾錢

送料各十二錢

東京 博文館 本町

東京帝國大學文學科大學教授  
文學博士 姊崎正治 著

# 新時代の宗教

四六判洋裝上製函入  
紙數四百六十頁  
正價壹圓貳拾錢  
送料八錢

「大戰の爆發で世界は大震蕩し、人心は根柢からゆるぎ出した、地大いに動いて、新なる泉の湧くべき時、大破壊に續いて大建設の起るべき氣運は、蕭々として近づきつつある、人性の本然を回復し、之を文明瀾熱の火坑から救ひ出し、而して人間らしい生活の新世界に人生の醇化を貫徹するは、人類今後の任務」此任務に當るべき宗教如何。是れ本書が世の覺醒を要求する問題也。

## 宗教と教育

正價金八十錢  
送料八錢

## 根本佛教

正價金貳圓  
送料十二錢

株式會社 博文館 東京 本町



大僧正  
本多日生日師著書

- 日蓮主義  
正價壹圓十錢  
送料六錢
- 修養と日蓮主義  
正價壹圓十錢  
送料六錢
- 日蓮聖人正傳  
正價壹圓六十錢  
送料八錢
- 日蓮聖人の感激  
正價壹圓六十錢  
送料八錢
- 日蓮主義綱要  
正價壹圓六十錢  
送料八錢
- 國民道德と日蓮主義  
正價壹圓十錢  
送料四錢

●●● 町本館文博 ● 社會式株 京東 ●●●

姉崎山 博智 共著

高山樗牛  
と  
日蓮上人

樗牛が一生は日蓮上人の渴仰を以て終れり。上人が上行再現の自覺は、樗牛をして久遠の靈光に接せしめたり。最後の一年間に於ける樗牛氏の信仰と熱血とを集め、加ふるに況後録の註解と、日蓮上人及び樗牛の信仰に関する編者の論評を加ふ、一部日蓮主義の好指鍼にして、又實に樗牛が眞信の告白集なり。

中判洋裝總クローズ上製  
口繪數葉紙數四六四頁

正價壹圓五拾錢  
送料八錢

三五判洋裝上製  
紙數二百九十頁  
正價金壹圓  
送料六錢

株式會社  
博文館發行

淫祠と邪神

和田徹城 著

聖天、大黒、稻荷、鬼子母神、辨天、毘沙門、閻魔、帝釋、金毘羅、庚申、摩利支天妙見、秋葉三尺坊等の如く、富貴榮達、息災延命の靈驗を吹聴して世人の僥倖心に投ずる神に就て、その本性を根本的に解決せんとしたるもの、印度、支那、日本に互りて成立の因由、信仰の變遷を尋ね、或は祕密裡に傳ふる神像修法に論及し、各の神に就てその功德と價値を決定せり。これ等の神に祈禱して福德と健康を得んとする者、これ等の神の流行を見て心外する者、俗間信仰を見て國民思想を云爲せんとする人士に一讀を薦む。



# 歸一協會叢書

東京帝國大學文學部教授  
 文藝學博士  
 姊崎正治編

歸一協會は、社會・宗教・道德・經濟等各方面の問題と活動とに對して、調節歸一の氣運を促進するを目的とし、其研究討議の結果を發表する爲に、茲に叢書を續刊す。

## 既刊書目

- 第一輯 社會道德上の共同責任
- 第二輯 社會問題の建設的解釋
- 第三輯 大戰と戦後の新局面
- 第四輯 交戦國民の心理狀態
- 第五輯 社會問題と教育問題
- 第六輯 現代青年の宗教心

本書に限り 正價金壹圓 送料八錢

菊判洋裝美本  
 紙數各約二百頁  
 正價各七拾錢  
 郵稅各六錢  
 東京株式會社 博文館



終

